

# 悲劇に惹かれる心理メカニズム

## The psychological mechanism behind human attraction to tragedy

清風南海高等学校 2年E組 家治 娃柚美

**Abstract** : This study proposes that the appeal of tragedy stems from the death drive, expressed as latent masochism. Tragedy allows people to safely experience symbolic suffering, discharging destructive impulses without real risk. On the other hand, excessive empathic pain triggers defense mechanisms, causing some people to avoid tragedy altogether.

**Keywords** : tragedy, latent masochism, death drive, safe suffering, defense mechanisms

### 1. 研究背景

古くから広く人気を集めている悲劇的物語は数多く存在する。これは人が悲劇に魅力を感じていることの証左であるが、人は、悲劇に惹かれる一方で、不快な感情も生じるという心理的パラドックスを抱えている。映画や小説を見るなかで、登場人物の不幸な出来事を目にして不快を感じたのにも関わらず、再度悲劇を見たいと考えるようになる人は少なくない。従来、このような悲劇の鑑賞者の心理は、アリストテレスが論じたカタルシス、すなわち感情の浄化作用によって説明されることが多かった。また、現代の研究では、「安全に苦痛を体験できる場」を提供する役割や、不快な感情の疑似的な体験としての捉え方が検討されてきた。しかし、実際に人が不快を伴う悲劇を好み、その苦痛を求めるに至る心理的プロセスについては未だ十分に解明されておらず、悲劇を嗜好する人の心理状態について解明したいと考えた。

### 2. 研究目的・意義

本研究は、悲劇を好んで見るに至る背景の心理的プロセスを明らかにすることを目的とする。そこで、美学論や悲劇論で議論される悲劇の「安全な苦痛」を求める原因を人の内的欲求として捉え直し、悲劇を好む心理の基盤を探る。本研究により、悲劇の役割についての新たな視点を得られ、美学および心理学における感情研究の理解が深まると考えられる。

### 3. 研究方法

本研究では、自ら立てた仮説に基づき、悲劇を「安全に苦痛を体験できる場」とする理論を基盤とし、美学的議論、感情研究、精神分析学（死の欲動・マゾヒズム論）など複数領域の文献を総合的に精査し、悲劇嗜好に関わる既存の枠組みを説明する。そして悲劇特有の特徴とその心理的役割を捉えたうえで、悲劇を好ましく思う人の心理的プロセスを組み立て、概念モデルとして提示する。また、悲劇に不快感を覚える人に見られる心理作用についても、同様の手順で考察する。

### 4. 結果・考察

本研究では、悲劇を、「破滅や不幸を主題とし、観客に強い感情的反応や心理的動揺を引き起こす芸術形式」と定義する。悲劇を主題とする作品は広い分野で見られるが、とくに映画や小説等の、鑑賞者が物語性を捉えやすい分野を取り上げる。

人が悲劇に惹かれる理由は、人が不快な感情を得たいというマゾヒズム的欲求を持っているからであると仮定した。しかし、不快な感情を得るためという動機は一般的なものではないと考えられ、悲劇が広く人気を得ていることの要因とするには不自然である。

ここで、死の欲動（ジークムント・フロイト、1920）を引用する。フロイトは、人間の精神には生

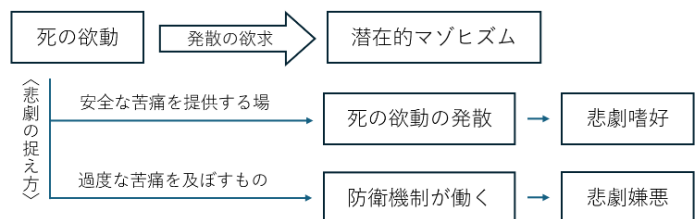
命維持を志向する生の欲動（Eros）と、無機の状態への回帰を求める死の欲動（Thanatos）が共存すると論じた。死の欲動は自己破壊性や攻撃性として現れるとされ、後続の精神分析学でも破壊衝動の基礎概念として扱われてきた。これに基づき、死の欲動が内在化されることで生じる自己破壊欲により、悲劇が、死の欲動の発散の場としての機能を持つようになる。

一見、悲劇鑑賞で自己破壊欲を満たすという論理は飛躍しているように思えるが、悲劇への感情移入は、鑑賞者自らのものとしての不幸の疑似体験を可能にさせる。疑似体験によって、鑑賞者は、自らの安全が保障された状態で、個人的な体験として不快を得ている。悲劇で得られる安全な苦痛の役割についてはこれまでも多く議論されており、それにより、内的な死の欲動を躊躇せず発散できるのである。死の欲動を人の根本にある精神と考え、その発散は、自分への危害がない状態で苦痛を安全に経験したいという欲求として表れていると見て、これを潜在的マゾヒズムと捉える。

ここまで、悲劇を嗜好するメカニズムについて解明した。しかし一方で、世間には悲劇を嫌悪する人も存在する。前述のように、死の欲動を人の根本にある精神と考えるなら、死の欲動の発散は必要なものであり、悲劇嫌悪の心理は生じえないように考えられる。

悲劇嫌悪の心理は、死の欲動の不在ではなく、悲劇の持つ、安全な苦痛を提供するという役割が破綻している場合に生じるものだと考えられる。この破綻は、鑑賞者が共感に伴う苦痛を過度に感じたときに働く防衛機制（アンナ・フロイト、1936）が要因である。防衛機制とは、不安や脅威から自我を保護する無意識的な防衛本能のことである。悲劇の持つ、死の欲動の発散の場としての役割は、安全な苦痛を得られるという利点により機能するのであり、苦痛が安全だと感じられない鑑賞者にとっては、脅威となると考えられる。

これらを踏まえて、概念モデル図を作成すると右のようになる。鑑賞者に不快な感情を与える悲劇を嗜好または嫌悪する要因は、死の欲動という心理作用の影響であると考察される。



## 5. 結論及び今後の展望

本研究で立てた仮説は、人が悲劇に惹かれる理由は、人が不快な感情を得たいというマゾヒズム的欲求を持っているからだというものであった。この欲求は、死の欲動によって引き起こされ、潜在的に働くものであるという解釈を加えると、理論的には概ね正しいと捉えることができる。

この研究では、悲劇の役割を、横断的な分析をもとに捉えており、総合的な客観性と普遍性を備えていると考える。悲劇を鑑賞する際、本研究の仮説が役割のひとつとして機能していると考えられるが、それぞれの領域で、他の要素と融合し、実際にどのような効果が生まれるかについては予測できず、更なる研究が必要である。

## 引用文献

- ・アリストテレス. 藤田嗣治・谷口幸男 (翻訳). (1973) 『詩学』 岩波文庫.  
(Aristotle. (c. 335 BCE) 『Poetics』 London: Macmillan.)
- ・Freud, S. (1920) 『Beyond the pleasure principle』 International Psycho-Analytical Press
- ・Freud, S. (1924) 『The economic problem of masochism』 International Journal of Psycho-Analysis, 5, 207-212.
- ・Jonathan Gilmore. (2025) 『Paradox of Tragedy』 Stanford Encyclopedia of Philosophy.  
<https://plato.stanford.edu/entries/paradox-of-tragedy/> (2025/11/25)
- ・佐藤 普美子, 河谷 淳. (2018) 『朱光潜『悲劇心理学』における悲劇論の検討』  
駒澤大学総合教育研究部